

幕府の滅亡

執筆・講師
小風秀雅

学習のねらい

日米修好通商条約について孝明天皇の勅許を得ることと、13代将軍・徳川家定の死により、次の将軍を誰にするのかは大きな政治問題であった。大老・井伊直弼は強引に問題を解決しようとしたが暗殺され、幕府の動揺に拍車がかかった。そうしたなか、西南雄藩の長州藩と薩摩藩は倒幕を志向するようになり、密かに盟約を結んだ。諸藩を統制できなくなりつつあった幕府は1867年、大政奉還を行い、政権を天皇に返上した。大政奉還を決断した将軍・慶喜の狙いは何だったのだろうか。また、幕府に対して薩摩藩と長州藩はどんな対応を取ったのだろうか。

桜田門外の変から公武合体へ

ペリーの来航を機に、これまで政治の発言権を持たなかった親藩・外様の有力大名や公家などの層の活動が活発になった。

井伊直弼は幕府の政治的権威を回復するため、2つの決定を行った。第一はこうした広い層の人々の意見を聞かず、朝廷の攘夷の意向も無視して、日米修好通商条約を締結した。第二は、13代将軍・家定の跡継ぎ問題をめぐって、有力大名の推す一橋慶喜を排して紀州藩主の徳川慶福を跡継ぎに決めた。

さらに井伊は、幕府を非難する動きを強めた人々を弾圧し、一橋慶喜を推した公家、大名、幕臣や、吉田松陰らの尊王攘夷派を多数処罰した。これを安政の大獄という。桜田門外の変は、こうした井伊の強権政治への反発から起きた。以後、幕府は独裁的な政治を行うことは困難になった。

井伊のあとを継いだ老中・安藤信正は、対立した朝廷との融和を図って、幕府の政治力の回復と政治の安定を目指した。これを、公武合体という。しかし、朝廷をめぐる幕府と長州藩の政治の主導権争いは、この後、一層激しくなっていた。

攘夷から倒幕へ

1863年、攘夷を主張して朝廷の実権を握っていた尊王攘夷派の長州藩は、朝廷を動かして幕府に攘夷の実行を約束させ、下関を通過する外国船を砲撃した。しかし薩摩藩と会津藩は、公武合体派の公家と結んで、攘夷派の公家を追放した。翌年、長州藩は藩兵を上京させたが失敗に終わり（禁門の変）、幕府は長州追討の兵を起こした（第1次長州戦争）。また前年の砲撃の報復としてイギリス、フランス、アメリカ、オランダの4か国の軍艦が下関を砲撃し、砲台

を占拠した（四国艦隊下関砲撃事件）。しかし、高杉晋作らが保守派から藩政を奪い、列強との戦闘に敗れた経験から、藩論を攘夷から倒幕へと転換させた。長州と幕府の対立は決定的になった。

薩摩藩は一橋慶喜と近く長州藩と対立していたが、1863年の薩英戦争で鹿児島城下を砲撃されると、列強の軍事力を痛感し、西郷隆盛や大久保利通らが倒幕へと舵を切っていった。1865年に幕府が命じた長州追討の命令（第2次長州戦争）に従わず、66年には、坂本龍馬らの仲介により薩長同盟を締結し、孤立していた長州を支援する立場を明確にした。そして67年には両藩は武力倒幕で意見が一致し、倒幕の密勅を得るのである。

大政奉還から王政復古へ

徳川（一橋）慶喜はもともと、島津久光、松平慶永らの有力大名と結んで幕政改革を進めており、その立場は尊皇であり、公武合体の推進者であった。長州藩が京都から撤退したのちは、もっぱら京都で政治活動を展開していた。

幕府政治を止め、新たな統一国家を造ることは慶喜の主張でもあったが、あらたな政治体制において主導権を握るために大政奉還に踏み切った。慶喜の政治力は、10月の大政奉還の後も、さらに12月の王政復古の大号令の後も、失われてはいなかった。

しかし、鳥羽・伏見の戦いが始まると、慶喜は江戸に帰還し蟄居して、戦う意思のないことを示し、朝廷側が江戸に無血入城することで、朝廷側が政権を握ったのである。

その後の箱館戦争までの後半の期間は、いわば慶喜という中心を失って分散した旧幕府勢力を一つ一つ鎮定していく期間であり、明治政府を成立させる生みの苦しみの時期であった。